

第46回「はちしん灌花塾 ～郡上の歴史の補遺を学ぶ～」開催

4月20日(土)第46回「はちしん灌花塾」が旧本店6階大会議室において開催されました。

地域史家高橋教雄先生をお招きして「白山開山と泰澄」と題して講義いただき、当日は当金庫の役職員や一般参加の方計39名が受講しました。



<美濃馬場長瀧寺の成立、美濃郡上と泰澄開祖の結びつき>

長瀧寺の寺伝『長瀧寺真鏡』には、「長瀧寺は養老元年（717）に泰澄が白山を開山し長瀧に社坊を建てた」とある。

郡上北部の神社と寺の関係を調べると、ほとんどの寺が白山社との神仏習合である。室町期以前に白山信仰は郡上一円に広がり、白山信仰＝泰澄という認識により、寺社の泰澄創立伝承が生まれた。

白山信仰は郡上の伝統文化の源であり、郡上おどりは白山神降ろしの神事、大神楽は神迎え神事、掛踊りは村継ぎの神事、長瀧の延年等々、これらはすべて白山信仰を源流に持つ民俗芸能である。

加賀・白山比咩神社に伝わる『白山之記』には天長9（826）年に三馬場が開かれたとあり、白山信仰は9世紀ころ法相宗の山岳道場と天台宗が結びつき成立した。

越前・平泉寺は、泰澄白山開山伝承を取り入れ白山信仰を主導した。美濃・長瀧寺では、13世紀に中世修行道裏差・表差、鳩居峰が成立した。

<泰澄の絵図>

長瀧寺の阿妙院にある「泰澄大師絵図」は最古の絵図で、白山を仰ぎ見る泰澄の下に臥行者と浄定行者が描かれており、この絵図を基本にその後の泰澄の図像が作られた。

<大谷寺の木造泰澄と泰澄寺>

越前麻生津地区は泰澄生誕の地とされ泰澄寺が建てられた。越前越知山大谷寺が所蔵していた「木造泰澄及二行者座像」（国重文）は13世紀以降に作られたもので、現在は国立博物館に移管されている。

<『泰澄和尚伝記』の最古の写本は正中2（1325）年>

『泰澄和尚伝記』の奥書には、天徳元年（957）に大谷寺の僧神興が、天台僧浄蔵の口述を基に書いたとあり、10世紀頃には泰澄伝承が定着していたと考えられる。

【泰澄生涯年表】	
682年	越前麻生津で生誕
695年 14歳	越知山で登山修行
717年 36歳	白山登拝
722年 41歳	元正天皇への加持の功により護持僧となる
730年 48歳	写経（法隆寺一切経）の奥書に泰澄の署名
736年 55歳	玄昉を訪ね十一面経を授けられる
758年 77歳	越知山大谷に籠る
767年 86歳	越知山で入寂

<泰澄の生きた越知山信仰>

泰澄は、越前麻生津の海民の生まれで、越知山行場に付属する山寺の修行僧となり法相宗を学び、奈良の興福寺、法隆寺に出入りした。北陸での神宮寺創建にも関わり、呪験力を高めるため高山での行場（白山行場）を開拓した。

<泰澄が生きた北陸の宗教情勢>

北陸では平野部の私寺と、それに付随する低山に行場を持つ山寺の信仰圏が成立していた。

山寺には在俗の「沙弥」と呼ばれる民間宗教者たちが集まり修行場としていた。沙弥は高山に困難な苦行を求め、高い呪験力の獲得を目指し、千メートルを超える高山に行場を開拓した。泰澄もそうした沙弥僧の一人であった。

9世紀には「宗叡」「賢一」などの中央の天台僧が白山に入山するなど、白山は高山の優れた行場として中央僧と地方僧の交流の場となった。

<白山の都での認知>

白山で修業した沙弥僧は、単なる地方の山林修行者の域を超え、験力を備えた修験者として、病気平癒を行う疾病禪師として中央に進出した。

白山信仰圏は拡大し、神仏習合により白山神は白山大菩薩の権現とする神仏認識が定着した。

10世紀には十一面観音菩薩を本地仏とする天台宗本地垂迹説により、中央で白山は観音浄土と認識された。11世紀には白山信仰圏の成立とともに泰澄の白山開山伝承が定着し、越の大徳と呼ばれた『泰澄和尚伝記』が創作された。

<泰澄伝記の必然性と平泉寺支配>

北陸の白山信仰圏は天台宗の勢力下となり、久安3（1147）年以降に平泉寺の支配が確立した。その過程で平泉寺は白山開山の正統性を確立するため、天台宗の本地垂迹説を主張し、『泰澄和尚伝記』を基に白山神の神威を増す伝承を成立させた。これにより、泰澄の存在は虚像化した。

<泰澄は実存したか？泰澄署名の真偽>

『根本説一切有部毘奈耶雜事』^{こんぽんせついつさいうぶひなやぞうじ}という經典の奥書には、「天平2（730）年に写す 泰澄」と署名がある。

泰澄の存在については様々な説があるが、実在説の史料根拠はこの奥書によっており、この經典は法隆寺に一切經として納められていた。泰澄が法隆寺の写經僧であったことが証明されれば、実在した可能性は高くなる。

<写經所の泰澄と僧綱行信との接触>

天平10（738）年に法相宗の僧綱^{そうごう}（奈良仏教の最高指導者）体制が成立し、天平期の官寺と山林仏教は法相宗で密接につながっていた。

法隆寺の東院伽藍を復興した僧綱行信^{そうごうぎょうしん}は、法相宗の最高指導者として活動し、泰澄の写經は法隆寺を核とした法相宗僧の活動を示すものであり、泰澄は法隆寺の写經僧として、僧綱行信などの中央の僧たちと何らかの関連があったのではないかと考えられる。

<まとめ>

最後に先生は、「天平期の仏教の典籍は中央官寺の独占であり、唐から持ち帰った典籍を地方の修行僧が披見することは、かなり困難を伴う状況であった。

泰澄生涯年表にある『736年玄昉を訪問し、經典を被閲し、十一面經を授けられる』の記述を鵜呑みにするわけにはいかないが、当時の奈良仏教と白山信仰の関係を考えると、泰澄という修行僧が実存し、一時は法隆寺の写經生として、中央官寺での勉学の時期を持ったと考えられる。

一方で様々な泰澄伝承は、白山信仰が郡上の伝統文化に果たした役割を考えると、大事にしなければならない歴史的事実である。」と締めくくられました。

